

立教大学図書館所蔵大久保利謙文庫とその内覧会

— 歴史家の蔵書からみる史学史

佐藤雄基

0、はじめに

本稿は、二〇一七年一二月九日に開催したシンポジウム「大久保利謙と日本近代史研究 家族・学問・教育」(於立教大学池袋キャンパス)に伴う立教大学図書館所蔵大久保利謙文庫(以下「大久保文庫」)の内覧会の報告である。シンポジウムの午前中に著者が「大久保利武と利謙：立教大学図書館所蔵大久保利謙文庫からみた大久保父子の学問形成」と題する報告を行い、大久保文庫所蔵の図書やノート類などの資料を用いて、歴史家大久保利謙とその父利武の学問形成のあり方を検討した。これは立教大学図書館所蔵資料の活用を図るとともに、書き込みなどのかたちで個人の読書体験に関する情報を含む蔵書を史学史研究の史料として利用し、歴史家の学問形成の過程やその背景を探る「蔵書の史学史」の試みでもあった。そして、午後一時一五分より一時間程度、立教大学図書館一階のラーニングスクエアにおいて、図書館職員の方々の全面的な協力のもと、シンポジウム参加者を対象として、報告時に取り上げた大久保文庫の資料二二点の内覧会を実施した。午前中の報告とあわせて、書き込みなどの情報を含むモノとしての書物のもつ歴史情報に直接触れる機会を得たことで、最後に行われた総合討論は一層活発になったし、シンポジウム自体が立教大学図書館のもつコレクションの価値を再認識する絶好の機会となった。貴重なコレクションの展示をご快諾いただき、開催にあたっては協力をご惜まれることのなかった図書館のスタッフの皆さんにあらためて感謝申し上げたい。

本稿では、最初に大久保文庫の概要を紹介し、つづいて内覧会の際に参加者に配布した展示資料の解説(著者作成)に若干修正を加えたものを載せる。全二二点の展示資料は大久保文庫のごく一部分に過ぎないが、文庫のもつ資料的価値の一端が伝われば幸いである。シンポジウムの報告原稿(別稿)は新稿を加えて後日、論文集として刊行され、内覧会で展示した資料以外の大久保文庫の研究成果もまたそこで示される予定である。

1、大久保文庫の概要

大久保文庫は立教大学図書館のもつ個人文庫の一つである⁽¹⁾。その目録は、『大久保利謙文庫目録 附大久保利武コレクション』(一九九〇年三月)と『大久保利謙文庫目録 第二集』(一九九六年三月)の二冊が立教大学図書館により刊行されている。大久保文庫の概要はその二冊の目録の解題にまとめられている。

注意したいのは、大久保文庫が大久保利謙によって一度に寄贈された書物群ではなく、一九七四年に立教大学に一括して寄贈された後(和書三二〇二冊、洋書一〇二冊、総冊数三三〇四冊)(「昭和49年度助成金」の青印)、追加の寄贈が繰り返されたことである。一九八二年三月に新座保存書庫が完成し、そこに大久保文庫も移送された段階で、図書館の保存体制に信頼を寄せた大久保が、追加の寄贈を行ったという⁽²⁾。一九九〇年に完成した『大久保利謙文庫目録』は和書六四

(2)

四三冊、洋書八九二冊を載せ、洋書八九二冊の内三六八点四九四冊は父利武のコレクションであった(受講ノート類三七点四二冊含む)。『大久保利謙文庫目録 第二集』では和書二四一四点、洋書五二点(内利武旧蔵分二〇)が載せられている。

大久保文庫は、蘭学・洋学や大学史・教育史を中心として、明治期のほぼあらゆる学問分野に及ぶ書物を含み、文化史・学問史・思想史研究での活用が望まれる。とりわけ加藤弘之をはじめとする明六社関係のコレクションは、『明六社』などにまとまる大久保の明治期文化史研究の「史料」であった。教育史の関係でいえば、たとえば、京都市小学校創立三十年記念会編『京都小学三十年史』(一九〇二年)は、一九三四年の京都における関係者からの聞き取りと資料蒐集の際に入手したものであり、同年の論文「明治二年京都における小学校の設立について」(『大久保利謙歴史著作集』(以下『著作集』)四、吉川弘文館所収)に反映されている。これ以外にも、論文「中村敬字の初期洋学思想と『西国立志編』の訳述及び刊行について：若干の新史料の紹介とその検討」(一九六六年、『著作集』五所収)をはじめとして、蒐集した書物の史料研究自体も多い。

こうした書物の来歴は「書物の文化史」として重要であり、その一端は大久保を囲む対談記録である小関昌男「大久保利謙先生をかこんで」(『史苑』六二巻二号、二〇〇二年)にみえる。但し、大久保利謙という歴史家の学問形成を考える際、大久保文庫は基本的に善本コレクションであり、大久保の文化史研究や稀本コレクターとしての側面が表れていることには注意する必要がある。大久保利謙の多様な側面のうち、たとえば政治史・アーカイブズの関係については国会図書館憲政資料室が重要になる。他にも、大久保は父大久保利武宛の朝河書簡を朝河貫一研究会に⁽³⁾、利武宛での床次竹二郎書簡を東京大学百年史史料室に寄託している⁽⁴⁾。佐藤能丸氏が「史料の適材適所」と評するように、大久保は自身の所蔵する資料を適切と判断した場所に振り分けていたようである。

大久保文庫には大久保と同時代の書物は多くない。別稿で詳しく検討する予定であるが、学習院大学史料館所蔵「大久保文庫」のほうに晩年まで大久保が手元に残した書物は伝わっており、その学問形成を探る材料はむしろそちらのほうに多い。

これについては、シンポジウム当日、大久保は立教の大久保文庫には自分と同時代の書物を意識的に入れようとしなかったのではないかと今井修氏が発言した。その意味をどう考えるのか、大久保自身の同時代認識や過去との向き合い方を考えるときに重要になる。

また、大久保文庫のなかの大久保利武コレクションをどう位置づけるのかも大きな課題となる⁽⁵⁾。大久保からみた父利武の思い出は、自伝『日本近代史学事始め』(岩波新書)に一章を割かれている。学問形成という観点からみれば、立教の大久保文庫からはむしろ父利武の姿や諸活動がみえてくることに注意したい。後述するように、アメリカ・ドイツ留学中の利武のノート、日本人留学生の執筆した博士論文は留学生研究・文化交流史研究の上で重要な史料となろう。そして、大久保の知的形成を理解するにあたって、米独で学位を取得して、様々な文化事業にも関わっていた父利武の影響をどこまで見積もるのか。本格的な検討は別稿にて行うが、大久保文庫には歴史家個人の学問形成における家族や読書体験の影響という問題について具体的に考える素材があるのである。

シンポジウム当日は以上のような問題関心から、大久保文庫より以下の資料をピックアップして内覧会を実施した。その展示資料二二点は

I 大久保利武とその学問

II 大久保利謙の蒐集文献——明治文化史の基本史料

の二部に分けた。後半ではその紹介を行いたい。何れの資料も立教大学図書館蔵書検索システム(OPAC)に登録されており、検索の便宜上、「」内のタイトルは原則として立教大学 OPAC 登録のままとした。(87-80097) などとあるのは登録番号である。

2、内覧会の展示資料の紹介

I 大久保利武とその学問

(1) 「Annual Calendar and Alumni Record」(87-80097)

大久保利武(一八六五—一九四三)は一八八七年、イエール大学のロースクールに入学した。同じころに、アメリカには、鹿児島出身の松方幸次郎(松方正義三男)らも留学していた。イエール大学への日本人留学生たちがつくった「エール日本人会」名簿⁽⁶⁾によれば八八—八九年在籍だが、実際には八七—八九年在籍)。

これは利武が入学した一八八七—八八年(第六四期)のイエール・ロースクールが発行した便覧である。教師一覧、コース一覧、指導方法、学期と休暇、入試要項、試験、図書館と賞、学位、費用など、ロースクールの概要が記される。後半は一八二四—一八八六年の卒業生一覧(一八七八年の鳩山和夫・相馬永胤をはじめとして日本人留学生の名前もみえる)

なお、この時期の利武については、前述の利武宛の床次竹二郎書翰が知られる⁽⁷⁾。

(2) イエール時代の講演録などの合冊 (87-80140)

抜刷などパンフレット類を合冊して製本したもの。T. OKUBO のスタンプがあることから製本したのは利武自身か。以下、内訳を記す。

- ① The pardoning power: Where should it be lodged and how should it be exercised? / Francis Wayland. (1884)
- ② References to the history of presidential administration, 1789-1885 / W.E. Foster. (1885)
- ③ The constitution of the United States / Simeon E. Baldwin. (1875)
- ④ The incorrigible / Francis Wayland. (1886)
- ⑤ The responsibilities of the legal profession in a republic / Thomas F. Bayard. (1883)
- ⑥ Codification in the United States / George Hoadly. (1884)
- ⑦ The history of the federal convention of 1787 and of its work / John Randolph Tucker. (1887)
- ⑧ The judicial power of the United States in some of its aspects, particularly as illustrating in its exercise and development the true nature and essential characteristics of our compound form of government / Stanley Matthews. (1888)
- ⑨ An address delivered before the graduating classes at the sixty-fifth anniversary of the Yale Law School, on June 25th, 1889 / Chauncey M. Depew. (1889)
- ⑩ Report of the President of Yale University 1887-88. (1889)
- ⑪ Manual of the General Assembly of Connecticut 1889. (1889)
- ⑫ Circulars of information of the Bureau of education. no.4-1885. (1885)
- ⑬ Annual reports of the department of the Board of public works. (1888)
- ⑭ Annual report of the City auditor of the City of New Haven for the year 1888. (1889)
- ⑮ The coming slavery, The sins of legislators, The great political superstition / Herbert Spencer.

(4)

(1888)

⑩ Modern novel opportunity for christian union with a prelude on men, money and motive in missions
(1887)

①はイエール教授の National Prison Association での講演録 (1884年9月8日)

③は合衆国憲法、イエールのロースクールが印刷した自前教材で、書き込みがある。

④～⑨はイエールで毎年行われた講演録で、／以下は講演者の名前 (⑨のみ無題)。⑩はイエール大ロースクールの年次報告

⑪はイエール大学のあるコネティカット州の州議会の手引書、⑬⑭は大学所在のニューヘイブン市の土木部 (the Board of public works) 及び監査人 (auditor) の年次報告、⑫はワシントンで刊行された日本の教育制度に関する英文調査報告書。これらは利武が蒐集したものであり、利武の関心がロースクール在籍中から地方行政制度に向いていたことを示す。⑮はハーバード・スペンサーの著作、⑯はキリスト教関係の著作物。

(3) 「Moot court case / Yale Law School」 (42075989)

一八八七・八八年の大久保利武自筆ノート。印刷された判例が貼りつけられ、Moot court (模擬裁判) が行われた様子を示す。イエールのロースクールにおける法学教育・ケースメソッドの実態に関する史料となる。

(4) 「Reserch note on Japanese administration」 (89-73547)

(5) 「Research note on history of Japanese administration」 (89-73509)

ドイツ留学中の大久保利武の研究ノート (日本行政史)。利武は、ドイツ留学を希望し、米国公使陸奥宗光にスタイン (Stein) への紹介状を書いてもらっている⁽⁸⁾。法律から行政学に関心を移していた。ドイツ滞在中の受講ノートは地方行政に関するものが多い。利謙は「父は学者になりたかったのだと思います」⁽⁹⁾と回想する一方で、「学究になりたかったわけではないようです」とも記している⁽¹⁰⁾。

(4) は日本語で書かれている。「日本地方制度 明治二十四年夏学期ハイデルベルク大学在学中稿」(一八九一年)と題され「第一 古代制度」以下「第七 明治ノ制度」まで行政史に関するノートがとられているが、明治以降の部分が詳しい。ノートの裏側からは「代議政体」に関するノートがある。(5) は英語で日本制度史についてまとめている (『大久保利謙文庫目録』には一八九二年一〇月)。博士論文 (6) の準備過程を探る材料となる。

(6) 「Die Entwicklungsgeschichte der Territorialverfassung und Der Selbstverwaltung Japans in Politischer und Insbesondere Wirtschaftlicher Beziehung」 (89-73257)

大久保利武が一八九四年にドイツのハレ (Halle) 大学に提出した博士論文「政治的・経済的關係からみた日本の領域制度及び自治発達史」。利武の手元に置かれた副本であろう。福田徳三の博士論文 (8) においても先行研究として引用されている。目次は以下の通り。

序文

第一期、古代 (西暦六四四年までの先史)

第二期、帝政期 (西暦六四五年から一一八六年まで)

第三期、中世 (一一八六年から一六〇〇年まで)

1、鎌倉政権 (Regime) (一一八六年から一三三三年まで)

2、足利政権と秀吉政権 (一三三三年から一六〇〇年まで)

第四期、徳川政権 (一六〇〇年から一八六八年まで)

日本における近代ヨーロッパ自治の導入

(7) 「De la transaction en droit français comparé avec le Code civil italien et le projet de Code civil japonais」 (87-74208)

1889年にリヨン大学に提出された梅謙次郎 Oumé Kendjiro (一八六〇—一九一〇) の博論『和解論』(フランス法における和解：イタリア民法典および日本民法草案と比較して)。梅は松江出身、一八八四年に司法省法学校を首席で卒業したのち、一八八六年からフランスに留学していた。

この製本済の博士論文は梅から利武に謹呈されたものである。とびらに梅の自筆で「A Monsieur T. Okubo / Souvenir l'amitié / Oume / 【サイン】」(/は改行)と記され、その下に利武の自筆と思われる加筆「Rec'd on 24th August '89 / Hannover!」がある。利武は一八八九年夏にドイツにわたり、梅もまた博論提出後はベルリン大学に留学しているのち、ドイツ(ハノーファー)で知りあった蓋然性はあるか。利謙は「親父とはパリとドイツで友人だったらいいです」と回想している⁽¹¹⁾。留学先での留学生同士の交流を示す貴重な史料である。

(8) 「Die Gesellschaftliche und Wirtschaftliche Entwicklung in Japan」 (89-73108)

日本の経済学のパイオニアとされる福田徳三 (一八七四—一九三〇) が、一九〇〇年ミュンヘン大学に提出した学位請求論文 *Die Entwicklung der Wirtschaftseinheit in Japan* (日本における経済活動の発展) は、*Die gesellschaftliche und wirtschaftliche Entwicklung in Japan* (日本における社会的・経済的発展) という書名でシュトゥットガルトのコッタ (Cotta) 社から出版された。日本経済史の先駆的業績であるとともに、欧米の学界で広く参照され、オットー・ヒンツェの比較封建制論(『封建制の本質と拡大』(未来社、一九六六年、原著一九二九年))における日本論の典拠となった。

本書は大久保利謙の蒐集本。木下英太郎蔵書印が抹消されている。木下英太郎は、一八七二年秋田市生、アメリカに留学してイェール(一八九九年経済学)、コロンビアの両大学で学び、博士号を取得、沖電気創業者の沖牙太郎の長女カク子(カク子)を妻として、沖電気の経営に参加した⁽¹²⁾。

(9) 「The Documents of Iriki, Illustrative of the Development of the Feudal Institutions of Japan」 (74-18400)

イェール大学で日本史を講じていた朝河貫一 (一八七三—一九四八) の主著『入来文書』(一九二九年)。「謹呈 大久保利武殿 朝河貫一」という朝河自筆の献辞がある。鹿児島県の武家「入来院家文書」を英訳し、注釈をつけたものであるが、アメリカでは古文書原文を印刷することができなかった。そのため、「入来院家文書」他古文書の翻刻(日本語)部分を日本で印刷し、その紙をアメリカに輸送し、英語部分とあわせて一冊の本としてアメリカで出版した。日本側で古文書原文の印刷の手配をしたのが大久保利武であった。

利武は日本エール協会(イェール大学の日本人同窓会)の第二代会長で、日本とイェール大学の交流に尽力したほか、大久保家の旧主であった島津家・鹿児島県の諸事業に関わり、島津家臨時編修所の総裁も務め、父大久保利通の史料収集にも自ら関わるなど、修史事業に理解が深かつ

(6)

た。朝河と大久保利武、そして『入来文書』は幾重もの縁でつながっていた。

(10) 「Catalogue of books, manuscripts and other articles of literary, artistic and historical interest, illustrative of the culture and civilization of old Japan; v. 1: "A"」(89-73362)

イエール大学の朝河貫一の呼びかけに応じて、日本エール協会で寄付を募って、一九三四年にイエール大学に寄贈した日本の古典籍・文化財コレクション、いわゆる YAJ (Yale Association of Japan) コレクションの目録。全四冊が合冊されている⁽¹³⁾。調度品・写経・版経・古文書・影像・墨蹟・和歌連歌・絵巻類・写本・版本・中国及朝鮮版本である。

四九名の有志者によって金二万一千三百円余が集まり、大久保利武が「兼ねて高誼を得ていた」黒板勝美（東京帝国大学教授、国史学）に委嘱し、蒐集の方針と品物の選択を委ねたという⁽¹⁴⁾。黒板の指示のもとで、三成重敬（東京帝国大学史料編纂官補⁽¹⁵⁾）が作成し、秋元俊吉（ジャーナリスト、『英語の日本』主幹）が英文作成に協力し、利武がカタログに序文を寄せている。

ちなみに、当初はイエール大学におけるオリент博物館構想のもとに収集が開始された。博物館構想はその後、立ち消えたが、イエール大学のエンジェル総長の取り計らいで新設のスターリング記念図書館に一室を用意されることになり、日本史や日本文化・東洋文化を学ぶアメリカ人学生の教育研究に資されることになった。(11)の利武序文によれば、日本側には「国民相互の理解親善」「国交上に裨益」という平和文化外交の意図があった。

利武は Herbert Brucker, Charles Seymour 著「米国エール大学の二大新施設」を翻訳するなど（『啓明會紀要』一九号、一九三六年）(94-74789)、日本とイエールの交流に尽力していた。

(11) 「日本文化図録」大久保利武編纂 (94-73888)

一九三四年に YAJ コレクションをイエールに送る前、一九三二年一月に華族会館において重要品一二四点を陳列した。その際に撮影した重要品八〇点の写真帳（黒板勝美に題箋を書いてもらっていた）。一九三五年四月付の大久保利武の序がある（刊行は六月）。

(12) 「大久保利通」松原致遠編 (89-74538)

大久保利通の没後三十二年の時点で、『報知新聞』の記者松原致遠が、生前の大久保利通と親しく交遊をもった人物や大久保に仕えた下僚、それに利通の実妹、子息などに直接面会して聴きとった、大久保についての思い出やエピソード、印象などを語った談話を集めた書籍。『報知新聞』に一九一〇年一〇月一日～翌年一月一日、三月二六日～四月一七日に掲載され、その記事を底本にして一九一二年に新潮社から発行された。

この本は長く稀本となったが、一九八〇年に利通没後百年記念事業の一つとして、大久保利謙の提言に応じて鹿児島県で復刻され（非売品）、二〇〇三年にマツノ書店から復刻出版された。二〇〇四年には佐々木克（立教大における大久保利謙の指導学生で、京都大学名誉教授）の監修で、『報知新聞』掲載記事を漏れなく収録したバージョンが講談社学術文庫から出版された。

大久保利通三男の利武（利謙の父）が「親しく校閲の労を取り、煩瑣なる事実の末までも調査して訂正せられたる好意謝するに辞なきものあり」とされ、牧野伸顕も協力していた。利謙は家族への聞き取りなどに協力していたという（学術文庫版ではカットされた「凡例」）。佐々木克は、新聞連載の企画自体に利武が関わっていた可能性を指摘している⁽¹⁶⁾。

大久保文庫には同書が重複しているが、展示したほうは稀本となっていた初版本。「昭和八年九

月廿七日購入」の書きこみから、利謙が古書店より購入したものであると分かる。

Ⅱ 大久保利謙の蒐集文献——明治文化史の基本史料

(13) 「論文集：第3巻」 (88-75996)

「亡弟製本愛蔵せるもの也」「大久保利正遺品」と書き込みがある。利謙から弟利正（としまさ 一九〇一—一九四五）に贈られた抜き刷りを合冊したもの。なお、第一巻・第二巻は学習院大学史料館所蔵「大久保文庫」にある。ほかに利謙著『日本近代文芸』（89-74279）も利正の遺品。

(14) 「東京帝国大学五十年史」上冊 (88-80557)

大久保利謙の近代史研究の出発点となった。詳しい経緯は自伝『日本近代史学事始め』で語られている。鉛筆で下線がひかれている。

(15) 「鄰草」/加藤弘之著 (74-17878)

帝国大学総長などを歴任し、官学アカデミズムの育ての親となった加藤弘之（一八三六—一九一六）が、文久元（一八六一）年、二十六歳のときに書いた処女作。加藤は但馬国出石藩出身であったが、万延元（一八六〇）年に幕府の蕃書調所の教官となっていた。「立憲政治の長所を論じた日本で最初の文献」。「鄰草（となりぐさ）」とは隣国清国のことで、立憲制によって公平な政体を立てなければ亡国の道をたどるとし、日本の国政改革を論じた、という⁽¹⁷⁾。

活字となるのは明治二〇年代で、まず写本で流布した。原本は加藤家にあり、利謙が発見した⁽¹⁸⁾。本書は利謙が古書店で購入した写本で、「若林文庫」（一九八四年に没したコレクター若林正治の蔵書印）他計二つの蔵書印あり。

(16) 「Die Entstehung der Civilisation und der Urzustand des Menschengeschlechtes: erläutert durch das innere und äussere Leben der Wilden」/ von John Lubbock; nach der 3. verm. Aufl. aus dem Englischen von A. Passow (74-18347)

イギリスの考古学者ジョン・ラボック（John Lubbock）の著書 *The origin of civilisation and the primitive condition of man*, Longmans, Green & Co., London, 1870. のドイツ語訳、一八七五年版。本書には加藤の書き込んだメモ、下線が散見され、加藤弘之の研究の重要な史料である。「明治十一年六月 九マルク四十六」という書き込みから、加藤の購入時期・価格も分かる。加藤の初期の思想は天賦人権論であり、明治啓蒙期の開明官僚の思想を代弁するものであったが、明治一二（一八七九）年には天賦人権を否定する論説「人権新説」を発表しており、この本を契機に進化論に転向したと考えられている⁽¹⁹⁾。

(17) 「開成學校講義室発會演説」 (87-80683)

明治一〇（一八七七）年三月の序がある。このころ流行した演説本の一つ。明治九（一九七六）年一〇月、開成学校に大講義室が完成したことを契機に、濱尾新をはじめとする教員・学生の演説会が催された。

物理学者長岡半太郎（一八六五—一九五〇）の旧蔵本で、昭和一〇年七月付の長岡自筆の識語がある。

(8)

(18) 「Catalogue des objets envoyés : à l'Exposition universelle de Paris (mai 1878)」 par le ministère de l'instruction publique du Japon (87-74192)

「日本の文部省によるパリ万博展（一八七八年五月）への展示品カタログ」（「日本文部省出品目録」と邦語題）である。「宇川盛三郎」（東京神田区猿楽町一丁目六番地）蔵書印。宇川は外務省書記官などをつとめ、明治大学におけるアペールの講義での通訳などを務めた。

(19) 「御成敗式目」(94-73499)

『御成敗式目』は貞永元（一二三二）年に制定された。鎌倉幕府のみならず、広く武家法の基本となるとともに、手習いの教材として広く流布した。その関係で、数多くの写本・刊本が伝えられている。

大久保文庫本は、袋綴、半紙七行約一五～一八字。大久保の蔵書印以外の印が一つ押されているが未詳。第四条に「財物」、第一八条に「志孝」（菅本等では「贓物」「忠孝」とあり、さらには第六条に「沙汰来」（菅本等では「沙汰出来」とあることから、清原家系の本文をもつ⁽²⁰⁾。刊語に「加清家點」とあることと対応する。

刊語に見える小槻伊治（大宮伊治、一五五一年没）は室町時代の官務家。官務は太政官の史の最上首で、平安中期から算道の小槻氏が大夫史ないし官務を世襲した。清原宣賢の女婿でもあった。伊治は大永四（一五二四）年、享禄二（一五二九）年に『御成敗式目』を刊行している⁽²¹⁾。刊語に「加清家點」とあることから、本書は享禄二年版をもとにして万治二（一六五九）年に刊行された新版か⁽²²⁾。

なお、大久保文庫には穂積陳重旧蔵「読律書屋所蔵御成敗式目録」（87-82389）もある。

(20) 「宮崎法学博士口述 日本法制史」（87-80830）

東京帝国大学法学部の日本法制史初代教授として知られる宮崎道三郎（一八五五—一九二八）の「日本法制史」受講ノート（手書き）。作成者は不明だが、「明治二十九年第六月」という書き込みから、一八九六年という比較的早い時期の講義の様子を知ることのできるノートである。利謙の蒐集した講義ノートの一つで、大久保が購入した古書店「八琴堂」の紙が挟まっている。以下のような目次が知られる。

第一条 法制史ノ目的

第二条 法制史ノ材料及参考書

第三条 法制史学ノ大意

後篇 法制ノ沿革

第一部 国初ヨリ鎌倉開府ニ至ル時代

第一章 孝徳天皇以前

第二章 孝徳帝后ノ形況

なお、大久保文庫には宮崎の講義ノートが他に三冊ある（内二冊は（21）（22））。

(21) 「法学博士宮崎道三郎講 日本法制史」（95-74069）

「加藤蔵書」の蔵書印。明治三四（一九〇一）年五月下旬に「仏法二回生 加藤與三郎」が写したもの。加藤與三郎は東京帝国大学法科大学の明治三六年七月卒業生（東京出身）⁽²³⁾。卒業後は司法官となっていた（『官報』一九〇四年一〇月二六日）。目次は以下の通りである。

第一卷 国初ヨリ鎌倉開府前ニ至ル法制ノ影況

第一章 幸徳帝以前ノ状況

第二章 幸徳帝以後ノ状況

第一節 養老年末ニ至ル景況

第二節 養老年後ヨリ鎌倉開府ニ至ル状況

(第七款「司法制度」 第三項「手続法」まで)

(22)「宮崎道三郎述 日本法制史」(94-73143)

大正三(一九一四)年九月、おそらく大正三年度の宮崎の講義を受験者有志が筆写したもの(非売品)。部数四三部の謄写版(発行兼印刷者:石田松之助(東京市本郷区本郷六丁目二番地:大学赤門前横丁))。「沼田文庫」すなわち沼田頼輔(紋章学者)の蔵書印がある⁽²⁴⁾。沼田は日本紋章学の大成者であるとともに、古代史の著作もあり、古代法を主とした宮崎の講義録を買い求めたのであろう。目次には「(附録)法制史試験問題集概略」とあるが、本文にみえず。目次は以下の通りである。一九〇一年の(21)と構成は似ているが、孝徳朝・大化改新よりも推古朝を画期として重視する点が特徴か。

第一編 王朝時代ノ法制ノ沿革ヲ論ズ

第一章 推古帝以前ノ法制ノ沿革ヲ論ズ

第二章 推古帝以後聖武帝以前ニ於ケル法制

第三章 聖武帝以後鎌倉開府ノ法制ヲ論ズ

(第三節「良賤ニ干スル制度」まで)

なお、内覧会では展示しなかったが、大久保文庫にはもう一冊、宮崎の「日本法制史」講義録がある(89-74228)。「帝大有志会」が大正元・二年度の講義をもとに作成し、大正三年二月に刊行したもので、謄写本を製本して五十部刊行した。「昭和十年二月九日購求 尾佐竹先生を訪問せる日」という大久保利謙自筆の書き込みがある。目次は以下の通りである。

第一編 王政時代ノ法制沿革ヲ論ス

第一章 推古帝時代ニ於ケル法制ヲ論ス

第二章 推古帝以降聖武帝以前ニ於ケル法制ヲ論ス

第三章 聖武帝以後鎌倉開府前ノ法制ノ沿革ヲ論ス

(第五節「土地ノ区画」まで)

年度によって講義の終わりは区々だったようである。(20)以下四冊の講義録を通してみると、最初の本格的な日本法制史の講義であった宮崎の講義ノートがどのように形成されていくのかがみえてくる。日本法制史学史・教育史上の貴重な史料であるといえよう。

注

- (1) 立教大学図書館HP <http://library.rikkyo.ac.jp/archives/collection/individual/index.html> (最終閲覧日二〇一八年五月六日) 参照。
- (2) 大久保利謙『『大久保利謙文庫目録』刊行によせて』(『大久保利謙文庫目録』立教大学図書館、一九九〇年)。
- (3) 朝河貫一書簡編集委員会編『朝河貫一書簡集』(早稲田大学出版部、一九九〇年)。

(10)

- (4) 大久保利謙「床次竹二郎書翰 明治二十一年一月一日発信——アメリカ留学中の友人に帝国大学法科大学内外の状況を伝えたもの」(『東京大学史紀要』一一号、一九九三年)。
- (5) 解題は大久保利謙「大久保利武コレクションについての思い出」(『大久保利謙文庫目録』立教大学図書館、一九九〇年)。
- (6) Box60, Series III, Asakawa Papers (MS 40), Manuscripts and Archives, Yale University Library. 拙稿「イェール大学図書館所蔵朝河貫一文書(朝河ペーパーズ)の基礎的研究」(『東京大学日本史学研究室紀要』一三号、二〇〇九年、『朝河貫一資料』二〇一五年に再録)。
- (7) 前掲註(4)大久保論文。
- (8) 大久保利謙「陸奥宗光と留学生」(『日本歴史』四六〇号、一九八八年)。
- (9) 小関昌男「大久保利謙先生をかこんで」(『史苑』六二卷二号、二〇〇二年)一二九頁。
- (10) 大久保利謙『日本近代史学事始め』(岩波新書、一九九六年)二〇頁。
- (11) 前掲註(9)「大久保利謙先生をかこんで」一二一頁。
- (12) 前掲註(6)「エール日本人会」名簿および日本経営史研究所編『進取の精神——沖電気120年のあゆみ』(沖電気工業、二〇〇一年)三二頁。
- (13) 詳しい経緯は、さしあたり阿部善雄『最後の「日本人」:朝河貫一の生涯』(岩波現代文庫、二〇〇四年、初発表一九八三年)。
- (14) 詳しい経緯は大久保利謙「エール大学寄贈日本文化史料の蒐集」(黑板博士記念会編『古文化の保存と研究』黑板博士記念会、一九五三年)。
- (15) 日本歴史学会編『日本史研究者辞典』(吉川弘文館、一九九九年)三一六頁などでは触れられていないが、小泉八雲の遠縁で、八雲に協力するほか、八雲の没後はその妻小泉節子の「思い出の記」出版に尽力するなどの一面をもった(『20世紀日本人名事典』日外アソシエーツ、二〇〇四年)。
- (16) 佐々木克「解説」(同監修『大久保利通』講談社学術文庫、二〇〇四年)三〇〇頁。
- (17) 大久保利謙「明六社の人々」(『明六社』講談社学術文庫、二〇〇七年、初出一九六〇年)二四六頁。
- (18) 大久保利謙「最近の珍書発掘記:加藤弘之の「鄰草」の初稿本」(『日本歴史』四〇四号、一九八二年)。
- (19) 大久保利謙「加藤弘之博士の手沢本」(『大久保利謙歴史著作集 第六巻』吉川弘文館、一九八八年)。
- (20) 植木直一郎『御成敗式目研究』(岩波書店、一九三〇年)。
- (21) 久保尾俊郎「『御成敗式目』の出版と小槻伊治」(『早稲田大学図書館紀要』三八号、一九九三年)。
- (22) 前掲註(20)植木著、四八五・四九八頁にみえる「萬治二歳初春」の万治二年版(甲)が大久保文庫本に対応するか。
- (23) 東京帝国大学編『東京帝国大学卒業生氏名録』(一九二六年)二六頁。
- (24) 国文学研究資料館HPの「NIJL 蔵書印データベース」を利用した http://base1.nijl.ac.jp/~collectors_seal/ (最終閲覧日二〇一八年五月七日)。

(さとうゆうき 立教大学文学部)